

【特別寄稿】

東日本大震災への思い



高城 政久(50 回生)東北労災病院勤務

「東日本大震災」に被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。また、被災地において救助活動、復興活動に従事されている皆様に尊敬と感謝の意を表するとともに、一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

私も今日、震災により亡くなった石巻市の親族 5 名のだいぶ遅くなって執り行われた葬儀に参列してきました。

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分に発生した東日本大震災。マグニチュード 9.0 という大きな揺れが東日本を襲い、大津波が東北太平洋岸を襲った。

私は地震発生時、年度末と言うこともあって、書類の整理に追われていた。

突如、携帯電話から緊急地震速報のけたたましい着信音が響いた。その直後、大きな地鳴りと共に激しい縦揺れが起きその後、横揺れに変わった。何かに掴まっていなければ体がどこかへ飛ばされてしまいそうな揺れであった。今までに経験したことのない、とてつもない不安感が体を駆け巡った。目の前の書類や本は崩れ落ち、冷蔵庫や書棚はダンスを踊り、一つまた一つと倒れていった。もう収まるかも収まるかと、周りを見渡していたが一向に揺れは止まらず、気づいたら床に腰を下ろし机の脚を握りしめていた。ふと我に返り、スタッフのいる中央放射線部へ急いだが途中の壁にはひびが入り、天井のエアコンなどが落ちかけているのが目に入った。尋常ではない。気づけば照明は自家発電に切り替わっており、すれ違う事務局員は被害状況把握に追われていた。

やっと中央放射線部に入りスタッフを招集し、被害状況報告をさせたが、思いの外、放射線機器等に損傷は見られなかった。しかし、天吊りやシステムは通常電源の復帰と業者の到着を待たなければ最終的な確認は取れない。従って撮影や検査はすべて中止とし、患者さんを安全な場所へ避難させることしか術がなかった。

地震直後の緊急対策本部会議では、スタッフ 18 名全員の無事と大型機器の点検は業者待ちと報告をした。そしてその会議中大惨事が発生したことをテレビが報じていた。大津波が発生したのである。幸いにも当院は仙台でも高台に位置し、その心配はないものの、家族のことや家のことがかりであった。電話も通じず、道路は信号が機能せず、大渋滞が発生していた。すべての職員は病院に足止めされ、悶々とした気持ちを抱きながらテレビの前に釘付けであった。そんな中、徒歩で数時間かけ、自宅の状況を確認しに帰宅する者、車で行けるところまで、と言いながら帰宅をトライする者、皆無事を願い送り出した。そしてこれから約一週間、長い人で 10 数日間の病院泊まりがスタートするのであった。

私自身、一人暮らしの年老いた義母と一人息子とは連絡が取れず、これまで経験したことのない恐怖を感じ、徹夜で情報を集め続けた。すると息子がよく利用する電車が津波にのまれ行方不明との報道があった。ああ神よ、息子がその電車に乗っていないことを祈るしかなかった。

携帯で連絡を取ろうにもつながらない。身内友人の無事を確認したくてもできない。もちろん、行きたくても行けない。故郷に家族がいる人たちがみな経験したように、歯がゆい思いだった。

震災から 6 日後、義母の無事が確認できた。そこは妻の母校である小学校の体育館で、近所の人たちと肩を寄せ合いながら暖をとっていた。

普段は車で小一時間ほどの場所であったが道路の亀裂と段差、そして物資を求める車の列とガソリン給油待ちの車両が道を塞ぎ、一向に進めない。自衛隊の車に先導してもらい、3時間半後やっとの思いで到着した避難所は、小雪混じりの冷たい風が吹きすさぶ野外とあまり変わらない状況で、毛布や布団を頭からかぶる人たちがひしめき合っていた。何とも言えない感情が胸にこみ上げ、思わず涙が溢れてきたのを思い出す。そして翌日、連絡のつかなかった息子が一週間ぶりに元気な姿を現した。奇跡的に難を逃れ、見ず知らずの人に、3時間もかけて仙台まで送ってもらったのだという。

その日は夫婦で寝泊まりしていた病院を離れ、食器や書棚が倒れて足の踏み場もない状態ではあったが、今夜は親子水いらずで一晩を過ごしたいとの妻の願いを聞き、我が家に帰ることとした。冷凍の食材やインスタント食品は無事であったがライフラインはすべて寸断され、調理は出来ない。病院から支給されたおにぎりと、やっと探したスナック菓子で遅い夕食をとった。涙の塩味が効いてとてもおいしかった。その晩は久しぶりに川の字で寝た。とても幸せだった。

相当なストレスが身にのし掛かっていたのだろう。安堵感が出てくると今まで耳に入らなかったことや、いろいろな情報が次々飛び込んできた。

沿岸部の病院は殆ど壊滅的で、診療は出来ない。福島原発の事故により、避難を余儀なくされた人たちが、診療を求める患者さんたちが仙台に大勢押し寄せた。市内でもいち早く通常診療に近い状態まで回復した当院は、その任を果たすべく多忙を極めた。そんな中、当院は「独立行政法人労働者健康福祉機構避難所診療応援派遣チーム」を結成し、東北労災病院を拠点として、仙台市の避難所において約2ヶ月の間、24時間途切れのない診療活動に従事したのである。また、現在も福島Jビレッジでの原発職員や従事者の健康管理にもあたっている。

私は、労災病院放射線技師会の会長を務めていたが、被災地のこの状況の中、全くリーダーシップを発揮することが出来ず、忸怩たる思いであった。しかし、副会長に代行を任せ、地区理事との連携によって「労災病院放射線技師会災害情報ネットワーク」を立ち上げ、情報の収集と共有を行った。その中の一事例ではあるが、皆さんも頭の片隅に記憶していただければ幸いである。

福島原発事故後、日本よりアメリカへ渡航した人がいた。彼は、仕事柄かなりの回数アメリカに渡っており、入国はフリーパス同然であった。しかし、今回は日本から来たと言うだけで、入念な放射線チェックをされ、挙げ句の果てに入国を拒否されたという。必至に説明をした結果入国が認められたが、英会話が不十分な人は大変であっただろうと、彼は言う。

彼は渡航数日前に、RI心筋シンチ検査を受けており、その影響であったことが判明した。このことを受け、ネットワークを通じて「RI検査証明書:日本核医学学会資料」を利用し、必要な患者さんに提供することとした。日本の安全神話が崩壊した現在、我々はこの信頼を回復すべく、一層の努力が必要であることを痛感している。また、岩手、宮城、福島の病院が現在、再建と復興に向け必至の作業にあたっているが、デジタル化社会の今後の課題が見えてきた。

この震災で、ある病院の取組が功を奏した事例として、遠隔データ保存がある。この病院は震災の数日前に、電子カルテ、画像データ等の患者データを他地域に移行保存を行っていたのである。現在、病院再建中ではあるが、貴重な財産とも言える患者データが残されたことは、地域の医療人として喜ばしいことであり、教訓として多くの仲間知っていて欲しいことの一つである。また、放射能汚染問題ははじめ、瓦礫撤去作業等のアスベスト暴露による悪性中皮腫の問題、これらは近年中に発症することはない、20~30年後を見据える必要があり、我々放射線技師もこの問題に関与していくことは必須と考える。

最後に、この場をお借りして、一言御礼を述べさせていただきます。

全国の自衛隊の皆さん、警察官、消防士、医療活動の皆さん、尊いそして強い意志で参加されましたボランティアの皆さん、物資提供していただいた多くの皆さんに心より感謝申し上げます。

被災者の多くは、これから体調管理やメンタルヘルスケアが必要になってきます。どうか皆様方も、もう暫くこの方々を見守っていただきますようお願いいたします。

私は、この東日本大震災において、あらためて家族の愛、スタッフとの友情、そして、励ましのメールや電話を頂いた多くの方々の強い絆に支えられていることに、今更ながら気づかされました。今後は、医療人として一日も早い復旧と復興を祈り、失われた余りにも多くの尊い命をしっかりと受け止め、日々の診療にあたることを、新たに心に誓いました。

以上

* 通巻 201 号 2011 年 10 月 10 日発行(H23-No.3)より